

インターネット利用のテレビ番組

NHK 学校放送番組部 宇治橋 祐之

♡ インターネットを利用した教育番組 ♡

「インターネットスクールたったひとつの地球」は小学校5、6年生（11歳から12歳）を対象とする環境教育番組。昨年4月から「インターネットスクール」と銘打ってインターネットと連動した形で放送している（図-1 ホームページトップ）。

（放送 毎週 月曜日午前11：45～0：00
水曜日午前11：30～11：45
木曜日午前10：45～11：00
NHK教育テレビ

<http://www.nhk.or.jp/sch/inter-tatta/index.html>

現在、NHKでホームページを公開している番組は65（1999/6/1現在）。番組のストーリーや出演者紹介、撮影場所などの関連情報を中心とするホームページが多いが、「インターネットスクールたったひとつの地球」では教育テレビという特性を生かした形で「番組を見ている人に本当に役立つ双方向とは何か？」を考えながら番組とホームページの制作にあたっている。

以下、本稿では教育番組という分野で、少しずつ見えてきた「インターネットを利用したテレビ」の可能性について述べたい。

♡ 環境教育番組「たったひとつの地球」の概要 ♡

学校放送番組という分野があるのをご存知だろうか。通常、学校の授業で利用されることを目的としたもので、平日の午前中の時間帯に放送されている。初期のころは学校の教師の代わりを果たすテレビティーチャーが子どもたちに教えるというスタイルが多かったが、最近のものは、キャラクタ、ストーリーともにかなり多様化してきている。ぜひ一度見ていただきたい。

大きな特徴は、視聴形態が通常の番組とかなり異なることである。すなわち「教室という閉じた空間で」「複数の人間が同時に」「通常は番組の最初から最後まで」見られるということである。

通常、個人が家庭で見る番組はさまざまな形で中断される可能性がある。電話がかかる、誰かが話し掛ける、面白くないからチャンネルを変える。その点映画館で見るのに近い学校放送番組は視聴を中断される可能性はかなり少ない。その反面、何らかの理由で番組がつまらないと判断されると最初から見ることを止められてしまう。また、偶然途中から見始めるという可能性はかなり低い。そして通常は番組を見た後に子どもたちの間で話し合いが持たれ、番組で見た内容について調べる活動に

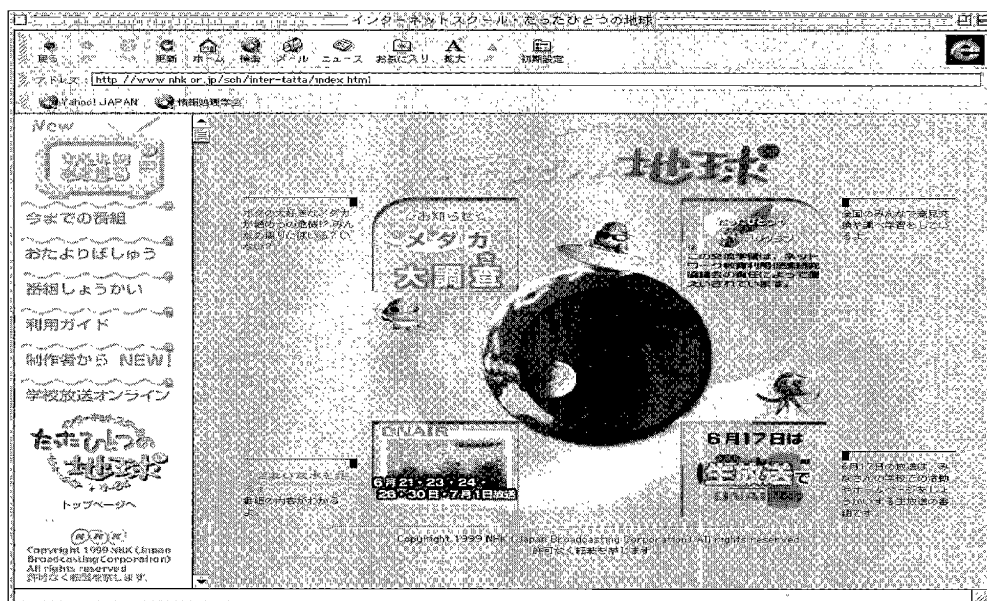


図-1 「インターネットスクールたったひとつの地球」ホームページ

広がることがある。

こうした前提があるため、番組は「その瞬間の面白さ」よりは「番組全体の強いストーリーやメッセージ」を重視する傾向が強くなる。偶然見た視聴者をひきつけるというよりは、定期的に視聴する人を少しずつ増やしていくのが視聴形態に適しているからだ。

インターネットと連動する前の環境教育番組「たったひとつの地球」もこうしたコンセプトのもと制作されてきた。タレントの清水國明さんがリポーターとして各地の現場を訪ねるのだが、ごみ問題について扱った「ごみを食べた動物」という回ではスーパーマーケットなどで使われるビニール袋がごみとして捨てられると、それが海にたどりつき、クラゲと間違えたウミガメが食べてしまうという問題を扱った。死んだウミガメを解剖すると次々と消化されないビニール袋が出てくるのが番組のヤマ場だが、単に衝撃的な映像として紹介するのではなく「人間が捨てたごみが動物を痛めつけていることをどう考えるのか」という全体のメッセージを重視した番組である（この番組は教育番組の国際コンクールで受賞、海外からも高く評価された）。

毎回のテーマはごみ、水環境、大気汚染、生態系など多岐に渡るが、強く明確なストーリー性を意識した番組制作は前身の番組から数えると20年以上続いてきている。

こうしたテレビ的な一方向のストーリーを大事にする「リニア」な制作手法をずっととってきたため、「ノンリニア」な、さまざまなストーリーを編み出せるインターネットと連動させることになった当初は、戸惑いが大きかった。

1年目ー「インターネットとの連動」

インターネットとの連動は1997年（平成9年）度からはじまった。大きな理由の1つに学校へのインターネットの普及があげられる。現在、日本の公立学校でのインターネット接続率は約2割だが、文部省によると2001年（平成13年）までにすべての学校にインターネットを接続する計画である。

これまでは、学校の中にあるメディアはテレビと印刷媒体だけであり、NHKとしても番組と関連するテキストが連動していればすんでいたのだが、時代の要請によりインターネットとの連動も求められるようになったのである。

後述するように、実際にいくつか連動させてみると、インターネットがない時代に「こんなことができればなあ」と考えていたことにも結びついていくのだが、とりあえずは次の3つの内容でホームページを立ち上げた。

- 1 ストーリー紹介
- 2 担当ディレクターの取材日記
- 3 番組に寄せられた意見の掲示板

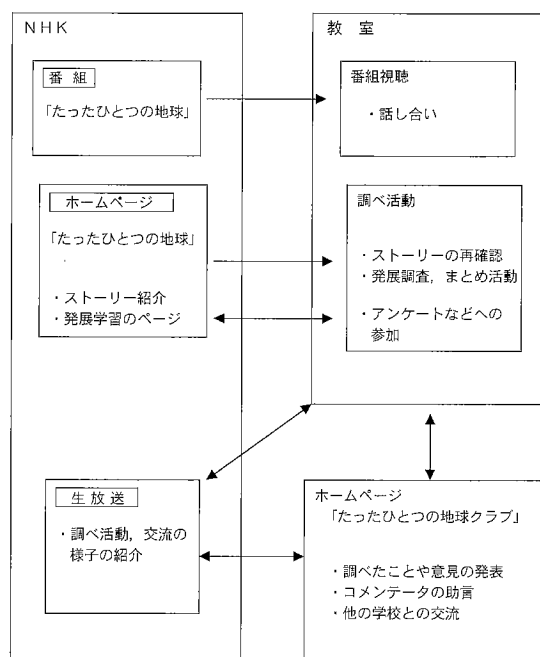


図-2 「インターネットスクールたったひとつの地球」番組とインターネットの関連図

現在、多くの番組のホームページがこうした構成になっていることから考えても、テレビとインターネットの連動の基本パターンなのであろう。録画しない限り消えてしまう番組を再現したい、限られた時間の番組では紹介しきれない関連する資料の提供や制作者による裏話を紹介したい、そして視聴者からの声を伝えたい。テレビでは伝えにくいこうしたことを見せる手段としてインターネットをまず位置づけた。

「インターネットスクールたったひとつの地球」では当初から特に「視聴者からの声」を大切にしてきた。教育番組の場合、視聴者はかなり限定される。その見ている人が何を求めているのかをきちんとつかむためにインターネットはかなり有効であった。もちろん郵便や電話による問合せ、反響はそれまでもあったが、手軽に送れるということで数はかなり増えた。もう1つ特に重要なのは視聴者が「お互いの意見を読むことができる」ことである。このことは現在のインターネットとの連動のあり方の大きなヒントになっている。

2年目ー「双方向」を意識したシステム作り

インターネットをテレビに利用しはじめての2年目からは視聴者との「双方向」をより意識するようになってきた。リニアな手法で制作されるテレビに新しい可能性を広げられるのではないかと期待もあった。1998年（平成10年）から現在までのシステムは図-2のとおりである。

まずベースになるのが15分の環境をベースにした番組である。放送に合わせて更新されるホームページは前年度3ページ程度だったものが12ページ程度に増えた。

内容は次のとおりである。

- 1 ストーリー紹介
- 2 発展学習のページ
- 3 参加型のページ

また、番組のホームページと連動する形で情報教育の研究者などによる「ネットワーク教育利用促進研究協議会」が運営する「たったひとつの地球クラブ」というホームページがオープンする (<http://plan2.mbc.ntt.co.jp/~club/>)。

ここでは放送に合わせて公開されるホームページで、同じ番組を見た子どもたち同士が感想を述べたり、それぞれの地域で調べたことを報告し合ったりすることができるようになっている。

以下、それぞれの項目について「何をねらってホームページを作成しているか」を述べていくが、教育番組に限らない放送とインターネットの連動のヒントがあるかと思う。



ワントゥワンの情報提供



(ストーリー紹介と発展学習)

前年度から引き続き掲載しているストーリー紹介と発展学習のページはどうしても1対マスの関係になってしまふ放送を補い、1対1の関係が築けるものを意識した。番組を見た個人個人が自分に必要な情報のみを確認できる構造である。

まず、ストーリー紹介については、紙芝居形式で静止画とテキストを紹介する形からハイパーリンクを多用した形式にした。

通常、番組を制作する場合、「間」という要素がかなり重要になる。注目させたいシーンの前には期待感を高めるための間をとり、シーンの後には振り返ったり余韻を持たせるための間をとる。当初テキストのみで番組を再現していたが、そこでは間のとり方を再現する点でやや難点があった。

現在ホームページで再現されるストーリーは基本的には1本のストーリーなのだが、キーになるシーンやセリフについてはボタンをつけて、あえて別ウィンドウを開くようにしている。番組を見ているときには計算された間を受動的に見ている子どもたちに、実際にクリックするという動作を通じて能動的に再体験してもらうことがねらいである。

そのためにはどういうボタンをデザインした方がいいのか(子どもがつい押してみたくなるものにしないといけない)、反応速度をどうしたらいいのか(答えが出るのが遅すぎると飽きるし、早すぎると印象に残らない)、そして何よりもリンク先の情報をどう面白くつくるかというあたりが現時点での課題である。

発展学習のページは取材日記のような読み物的なものでなく、授業で番組を見た先生や子どもたちが利用でき

るものへと徐々に変化していった。たとえば給食の残飯をきっかけに生ごみについて考えた「生ごみはどこへ」という番組のホームページでは「東京都のうめたて処分場のうつりかわり」という資料と「ごみの処理方法の国際比較」という資料を掲載した。前者は番組では部分的にしか扱わなかった埋め立て処分場がどんどん海側にせまってきていることからごみの量が増えていることを考えてもらうものであり、後者は世界各地のごみの処理方法の違いを見ることで日本のごみ処理の仕方について考えてもらうものである。

撮影場所や番組に出てきたもののつくり方や実験方法をホームページで紹介することも必要かとは思いますが、それでは番組で出た以上の情報を出すことができず、インターネットを生かしたことにならないのではないかと。というのがこの背景にはある。教育番組なので、番組を見たあとに子どもたちが調べる活動が期待できるから可能なかもしれないが、「番組の再現」だけでなく「番組を超えて広がる情報」をいかに提供できるかが今後のカギであると思う。

「番組を超えた情報」をどう利用するのかについては議論があるが、個人的には誰でも表現ができる時代に、表現の材料を提供する場も必要なのではないかと考える。特に子どもたちが何かを調べ、発表するきっかけとして必要であろう。著作権等の問題はありますが、個人で調べるきっかけになるテーマを提示し、それに関連する資料を公開していくことは今後求められていくのではないだろうか。



テレビ局と視聴者のインタラクティブ



(参加型のページ)

個人に対しての情報提供の次に、双方向を意識したページができないかというアイデアが生まれてきた。参加型のページととりあえず呼んでいる、番組を視聴した人がテレビ局に対してなんらかのアクションを起こすことが可能なページである。

ふつう、番組を見て何か感想を持ったとしても、それをテレビ局に返そうとする人は少ない。手段がないという理由も大きいだろうが、どう返したらいいのか分からない人も多いのではないだろうか。

双方向の番組制作という立場からいくと、視聴者に参加しやすい形式をまず整えたらどうかと考えた。たとえば前述の「生ごみはどこへ」という番組の場合、放送と同時に「学校で給食の残り物をどうしているか?」というアンケートをインターネット上で実施した(図-3)。なるべく多くの人に簡単に答えてもらうために選択肢を4つ(燃やしているか、肥料にしているか、家畜のえさにしているか、それ以外か)に絞った。そこにチェックをするだけで投票がすむ非常に簡単なものである。

結果は250程度であったがインターネット上だけで実

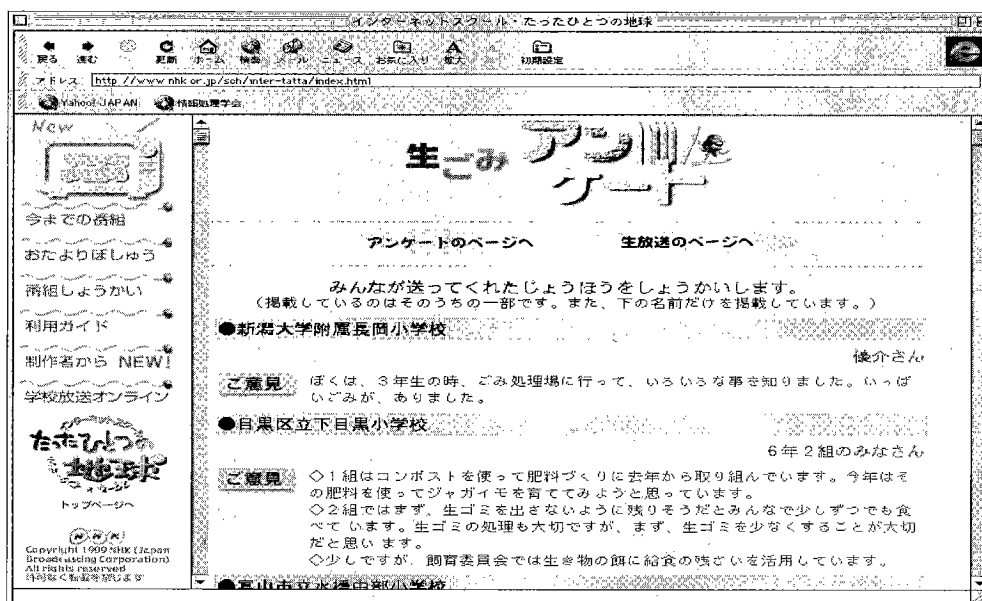


図3 生ごみアンケートに寄せられた意見

施したのではなく、放送で呼びかけたこともあり、認知度は高かった（実際には番組は見たがインターネットで投稿する環境のない学校も多かったようである）。

このアンケートについては結果をすぐにホームページで見られるようにしたのだが、そこでも「どう間をつくるか」という点で工夫をした。ボタンを押すとすぐに結果が表示されるのではなく、棒グラフがだんだんのびてきてイラストとその項目のパーセントが飛び出してくるようなものにしてみた。子どもたちにはいくらか楽しんでもらえたようである。こうしたゲーム的な要素で擬似的にインタラクティブを感じてもらうことで、単にスイッチを入れるだけのテレビでは感じにくい親近感を持ってもらえるのではないだろうか。

ただ、これだけでは必ずしも双方向とはいえない。

このアンケートのもう1つの工夫は「簡単に答えられる」と同時に「複雑にも答えられる」ようにしたことである。実はアンケートに答えると同時に、関連する情報のある人は書き込める欄もつくってみた。そうすると同じ学校給食の処理方法で「肥料にする」と回答していても、近所の農家がひきとっていたり、町ぐるみで制度ができていたり、学校の畑用に使っていたりとさまざまであった。掲示板としてホームページに並べてみるととても興味深いものになった。

実は、今まで教育番組を制作してきた中でなんとかすくいとれないかと思っていたのがこの部分である。ごみに限らず、地域差のあるテーマを扱った場合、「自分たちの地域はこうなっている」という手紙類は以前からよくいただいていた。これは同じ番組を見た他の学校の子どもたちにとっても面白い情報である。かつてそうした手紙類だけを紹介する番組を放送したこともある。けれども放送で紹介できるのは結局こちらの意図で編集したごく一部に過ぎない。

「俯瞰的に見える形で、こうした多様な意見を紹介で

きる場をつくりたい」という考えがあったため、このページの作成までは比較的容易にたどりついた。しかしそこから先どうするかというところで大きな問題にぶつかった。

🍎 1人で多数にどう答えるか 🍎

本稿ではここまで避けてきたが、ふつう「テレビで双方向をどう実現するか？」というときに一番問題になるのは「テレビ局がすべての質問に答えることが可能か？」ということである。もちろん通常の場合は問合せの数もある程度予想できるし、回答がシステムとして確立しているので問題は少ない。けれどもインターネット上で何かを呼びかけて、そのすべてに答えるのは相当に難しい問題である。1度返事を出すことは可能かもしれないが、さらに関係を深める、より双方向なものにするためにはどうしたらいいのだろうか？

かつて、電話で子どもたちの質問を受けつけて答える番組を放送したことがある。その分野の専門家をスタジオに招き「空はどうして青いの？」「地球はどうやってできたの？」といった質問に答えるものだ。数万単位の電話がかかってくるのだが当然そのほとんどには答えられない。

インターネットを利用してそれほど構造は変わらない。似たような質問をまとめておいてホームページで見ってもらうという方法はあるが、番組を通じて学習していく子どもたちすべてに1つしかない放送局あるいは1人しかいない専門家が答えていくのはやはりどうしても無理がある。

そこで考え出されたのが、ネットワーク上にコミュニティをつくれないうという考え方である。そのために前述のネットワーク教育利用促進研究協議会に協力いただき「たまたまの地球クラブ」というホームページが

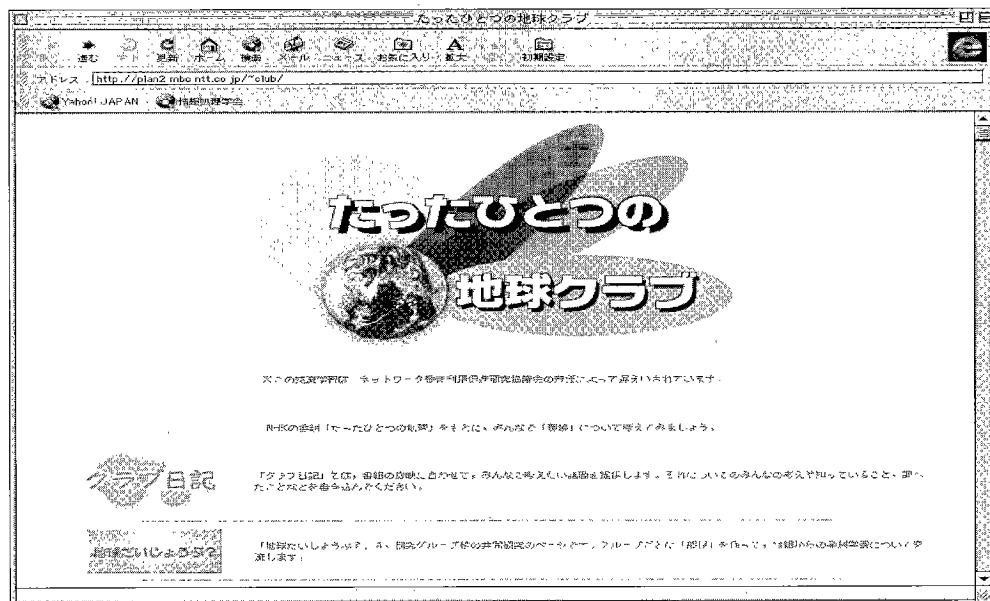


図-4 「たったひとつの地球クラブ」ホームページ

生まれた(図-4)。

🍎 テレビを機に広がる交流の場 🍎

「たったひとつの地球クラブ」というホームページでは「NHKの番組を元に環境について考えてみる」とまじり宣言されている。いわばテレビ番組「たったひとつの地球」の応援団といった感じである。

個々の番組の放映に合わせ、ごみ問題など番組のテーマにあった話題を提供し合う場がまずある。「クラブ日記」と名づけられたこのコーナーでは子供たちが自由に意見を述べるができる。ただ、それだけではなかなか話は進展しない。そこで子どもたちの意見を掲示板形式で並べるだけでなく、コメントが一人一人の子どもの発言にコメントをつけていく形式をとっている。

コメントは環境に対する立場の違い3人のキャラクターが使い分けられているが、ねらいは子どもたちに正解を与えることではない。むしろ正解を出さずに子供たち同士の議論や教え合いを大事にしていこうと考えている。「クラスでもう一度話し合ってみようね」とか「他の地域ではどうかな」といった形で他に誘いかけたり、議論がうまくかみあうようなコメントがつけられている。回答者ではなくあくまでも運営者なのである。

その中から特定の学校同士でさらに深く交流を深めた場合には、学校間の閉じた意見交換の場、「地球だいいじょうぶ」というコーナーも用意されている。

また、こうした書き込みはメールアドレスを持つことが少ない子どもたちが直接ホームページから書き込めるようにされているのも工夫の1つである。

こうした周辺環境が整った1998年度は、「テレビで番組を見る」「番組関連の情報をホームページから手に入れる」「ホームページ上のアンケートに参加する」「番組を視聴したり、アンケートに答える中から疑問に思った

ことを他の学校の子と話し合う」という活動が少しずつ循環しはじめた。単にテレビを見たりその延長でホームページを見るのでもない、テレビ番組を中心としたネットワークコミュニティが芽生えてきた。

🍎 3年目一再びテレビにもどす試み 🍎

テレビとインターネットの連動を考えて3年目にあたる今年、あらたな要素が加わった。テレビがすべて生であった当時をのぞくと、NHKの学校放送番組としては初の生放送番組の開始である。

テレビをきっかけにインターネット上で活動がさまざまに広がるのはよいのだが、どうしてもネット上での活動が多岐に渡れば渡るほど見えにくくなってくる。その全体像を知りたい、伝えたいという要求からこの番組が生まれてきた。

もう1つの要素としては、時差のあるネットワーク上のコミュニケーションでなく、「生で声を聞きたい」「生で姿を見たい」という非常にテレビ的な生理である。

この3月から始まった生放送の番組では、事前に番組を視聴し、なんらかの活動を繰り広げた学校とスタジオをテレビ電話で生でつなぐ。当日はその学校の調べたことをホームページで紹介してもらいながら生で対話は進んでいく。

当初はさまざまな不安があったのだが、始めてみるとこれは予想以上に面白い試みであった。

たとえばパソコン通信の時代からネットワーク上のコミュニティにはオンラインだけでなくオフラインミーティング、つまり実際に対面することも大切という指摘があった。会うことでそれまでに感じられなかったさまざまな情報を手に入れられるのである。

実はインターネット利用が盛んな小学校でも最近交流の手段としてテレビ電話の併用が多くなってきてい

る。子供たちにとっては大人以上に相手をビジュアルに感じとれるテレビ電話というメディアが意味を持つのであろう。

現在は時間の制約があり、1つの学校とスタジオを結ぶ形だけである。したがって1つの学校の生徒とスタジオとの話しかできないが、長時間の放送が可能になった場合には、スタジオをベースに複数の学校とテレビ電話をつないだり、ネット上でチャットをしたりということも考えられる。そしてこの場合、通常の生放送でインターネットを利用する特集番組と大きく異なるのは、参加者が事前に同じ番組を見て、そのことについて話し合うことができているということである。

1つのテレビ番組からスタートし、それぞれの興味の方向によりインターネット上で枝別れしたものが再びテレビ番組で統合される。もちろんそれが終わりではない。この生放送の番組の様子もインターネット上に残されるのでそこからまた次の枝別れがはじまっていく。

リニアなテレビの視聴とノンリニアなインターネットの活動とが反復運動をしながらダイナミックに展開していく。まだ端緒についたばかりだが、3年目の今年はそんなことをねらっている。

🍷 結局何が変わったのか 🍷

テレビとインターネットという関係から「インターネットスクールたったひとつの地球」という番組のこの3年間を見てきたが、制作者として特に大きく変わったと思うのは以下の3点である。

1 番組が終わらない

これまでのテレビ番組は決められた時間の中で完結してきた。もちろん反響が大きくシリーズ化するものもあるが、通常はある時間の中でどれだけの人が見たかで終わる。ところが最初から「見た人がどう動くか」を計算しそれをまた番組に取り入れる構造になってくると、感覚的にいつまでも番組が終わらない。「ネバーエンディングストーリー」というお話があるがまさにそんな気分である。

2 どう伝えるのがよく伝わるのか？

制作手法もかなり変わってきている。これまでは「番組として見て分からないものは分からない」という基準で取材した情報をセレクトしていったが「インターネット上で資料提供が可能かもしれない」「子どもたちが調べる中から発展し、生放送で紹介できるかもしれない」といったことになると単に1回の番組でなく全体の中のどこかで伝えられる可能性が出てくる。そうすると「どの段階でどのメディアを選ぶのか」という能力が問われるようになってくる。同時にテレビ的な間のとり方をどうインターネット上で表現するかといった技術的な知識やデザインをどうするかといったデザイン的な知識、そしてハイパーリンク構造を描ける構成力が非常に重要と

なってきた。

3 グループワークをどう進めるのか？

上の2つのような問題をクリアするのはなかなか個人の力ではできない。そうなるといかにたくさんの制作者を巻き込むか、あるいは、視聴者をも制作側に巻き込めるかということが必要になってくる。「インターネットスクールたったひとつの地球」の場合、これまで制作にあたってきたスタッフのおよそ3倍の人間が基本的な制作にかかわっている。視聴している子どもたちを考えるとさらにその数は多い。そうした大勢の人が意見を交換できる場をつくり、運営していくにはどうしたらいいか。まだまだ課題は多い。

🍷 テレビとインターネットのあらたな関係へ 🍷

最後に少し違う角度からテレビとインターネットとの関係を考えたい。最近、国際交流ということが教育現場でいわれ、海外とe-mailを交換したり、テレビ電話で話をするケースが増えている。けれどえてしてそうした活動は自己紹介や地域紹介をすぎると、次の話題が難しい。お互いの生活習慣の違いを述べるだけでは、なかなかネットワーク上での対話は進まないのである。

実はこの番組では実験的に英語版の番組を制作したり、英語版のホームページを元に交流を進めるという活動もしてみた。すると、同じテーマから出発しているため、言葉の問題を越えてネットワーク上での交流は広がっていった。問題が拡散してもベースの話に帰ることで再び話し始めることが可能なのだ。

結局「共通のベースになるお話」というのが双方向をつくるためには大切なのではないかと最近考えている。たとえば外国人と話をするときに「タイタニックを見たか？」とか「ワールドカップはどうだった？」というベースがあると話は広がりやすい。

同様にベースとなる番組が強い力を持つものであると、インターネット上での活動も広がるように思う。インターネットが完全に普及するとテレビは不要になるかというとは必ずしもそうはならないと個人的には思う。

となると最初に記した「番組全体の強いストーリーやメッセージ」を重視してきた番組の制作形態はそうは変わらないのではないか。

私たち制作者に今、いちばん求められているのは、その上で「インターネットとテレビ」、「リニアなもの」とノンリニアなものをどう組み合わせるか？という今までとまったく違うリテラシーをどう構築し視聴者に伝えていくかということであろう。

(平成11年6月23日受付)